

句 評

アリーマン・イスタダ先生

台湾川柳会

お題は「オアシス」です。オアシスは現代において、比喩的に精神的な安らぎや休息をもたらす場」として用いられる言葉になりました。全体的にこのような方向性を詠んだ作品が多かったですが、必ずしも「～オアシスだ」、「～オアシスよ」、「～オアシスね」といった説明的なフレーズを入れれば川柳になるというわけではありません。それは単なる「そうですよね」という同意の一言で終わってしまいかねないからです。川柳とは日々の生活の中にある人間機微を時に揶揄し、時に滑稽に描きながら、人を笑わせ、心を温めるようなものだと考えます。

「オアシス」

第一席 七時過ぎオアシスと化す値引き棚

生活感あふれる一句です。「値引き棚」を砂漠の中のオアシスに見立てる着眼点がとてもいいです。さらに、時間が「七時すぎ」と具体的に示されていることで、学生の作者だけではなく、仕事帰りの人々が覚えるささやかな喜びと、どこか哀愁の漂う表情までもありありと目に浮かびます。

第二席 人生のセーブポイント家にある

あえて「オアシス」という言葉を使わずに、ゲームの「セーブポイント」という現代的な比喩で表現している点が光ります。確かに、普段ゲームを知らない人にとっては馴染みの薄い専門用語カモしれませんが、この句を通して、その意味を知れば、より一層の納得感が得られるはずです。学校や試験、勉強、人間関係といった外の世界で戦って、心身ともに疲れはてても、我が家に帰れば、いつでも回復してやり直せるという安心感は、若い世代の心にも深く刺さる一句です。

第三席 オアシスも電波なければただの水

この一句は現代人にとっての命の綱の本質を突いて、非常に皮肉とユーモアの効いた作品です。心を癒したり、渴きを潤したりする水でも、ネットに繋げなければ、そのようなものはただの水に過ぎない。というといてもリアルです。ローマチックよりもリアルなものは共感を得やすい一句です。